

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りてようやく究屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大いそぎで棉を採り片付け、さんざん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしとに濡れて、いろいろの草が花を開いている。タウコギは末枯れて、水蕎麦藜など一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよると咲いている。民さんこれ野菊がと僕はわれ知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさっさと先へゆく。僕はちよつと脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行つてから、気がついて振り返るや否や、あれつと叫んで駆け戻つてきた。

「民さんはそんなに戻つてきないつたつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしてたの。私びっくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん私に半分おくれつたら、私ほんとうに野菊が好き。」

「僕はもどから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好ましいの。どうしてこんなかと、自分でも思うくらい。」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ。」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊のようだつてどうしてですか。」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊のような風だからさ。」

「それで政夫さんは野菊が好きだつて……」

「僕大好きさ。」

民子はこれからはあなたが先になつてといいながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思った事はその素振りで解

る。ここまで話が迫^せまると、もうその先を言い出すことはできない。話はちよと途切れてしまった。